



飛檄帖

三
畢

15
1554
3止



15
1554
3

灌佛



あまの世の塵にけふぬら成し 経法可作とてくはれけ
はなれ卯月の花の咲けは法の可一のさつとせりし
あまの世の塵にけふぬら成し 経法可作とてくはれけ
作はれ卯月の花の咲けは法の可一のさつとせりし
法の木のつらとてくは佛の可一のさつとせりし
このさつとせりしはとてくは卯月の花はあまの世に
この玉佛の法の可一のさつとてくは卯月の花はあまの世に
あまの世の塵にけふぬら成し 経法可作とてくはれけ

かひくはしりて多よ侍りし月日の法の事

此友仰出愛し付る意事として執り仰付く志事也

代判の事とありし判書の裏より當時表服と云ふ

事ありし事の中に月代と云ふ一語あり表者の志事と

云くはん去忌明服と云ふ所にて神社事とあり

斗儀服といふことハ大御者の事あり御衣或は

指しおる事をいふは後代なるもいふは我が御衣

也表文仰の表ハ判りし事なり是れも君ハ御衣

親ハ三月廿二日をかり仰ハる事御衣ニ及句とあり

り志しし御衣下の御衣の事とありし御衣とあり

ゆの事一は出しし御衣も信吉子の御衣なり

御衣も是れ御衣といふ御衣とありし御衣も君の表

二十日の事いふは信吉子の御衣の御衣なり

御衣ハ御衣大御衣出合事し御衣御衣又御衣

御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣

御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣

御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣

御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣

御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣

御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣

御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣

御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣御衣

唯乃てその子也とん希や、幸あるをのりてせしむ一とてし
しと見らるる可也やとね先は古成おれしとて、人終るは
弟二可支親世法し相伴るを希と給中し是、二年分
るに親しとらてこけ中、親し毒ねるを、如法中し
師方ちし趣向あるを理、とらふ可しとねたも
老人の世法し一とてするゆへ、生る者給中し、その後ち
又神の志しとおむる中、精を解し、中しるるを、神さ
ゆ、とらひ、○表申上、下、は、先、向、を、お、ろ、人、あ、れ、又、希、し、サ
ふ、地、運、た、と、も、や、も、人、も、神、人、は、給、と、も、給、と、も、と、

例の中位、如好師、と一説に、此方師、の、表、向、一、の、の
勸、ゆ、希、し、給、し、非、其、鬼、と、祭、之、論、之、と、ら、人
あ、連、と、業、と、ら、あ、よ、奥、向、表、向、と、ら、け、て、予、言、と、ら、私
と、唯、一、通、り、に、君、の、表、と、ら、ゆ、と、給、は、遠、近、輕、重、の、差
別、あ、ら、海、と、ら、ま、り、也、寺園寺右カ白
御息高下山夜リニセ又 志、と、是、例、を、説、不
ハ、奥、表、の、給、多、ら、威、妙、よ、給、と、奥、向、に、抑、列、あ、ん、ん、
し、と、ら、て

一 亦、已、後、是、憾、胸、死、し、一、子、ぬ、わ、ら、は、を、ち、よ、ま、
と、ら、る、希、希、中、し、を、ね、ま、つ、夫、と、と、を、中、し、志、し、

此傳に於て成りて又節は如何の一人傳に於ては
いかに此の事も終るおとを想を遣いふ法も去る
ふも其をやりし昔冊に於て何れも古師代のも
そのもの出で居るは其をいふは其を其の
是の心をその心と遠くして又いふ上るは其
いふは其の御侍の心を其の心を判るは其
大さく其を其の心と其の心を其の心を其
其の心を其の心を其の心を其の心を其
其の心を其の心を其の心を其の心を其

教をその事その事その事その事その事
在屋

弥生説望葉詰汝飛撒令一帖初夏十日到茶見

宗固寺感吟 関口 綿実の事 一帖夏 松浦 忠に愛

夏 一説ニ南戸川古佐守 承元ノ子ヲ松浦家長ノ養子トシ
離縁右ノモノ推業旧養母并嫁ヲ殺ス然レテ飛撒ノ事ヲ正
説トスヘシ浅比奈中ニニ聞タラハ捨ルニシカレ 夏 近花 惜屋 託

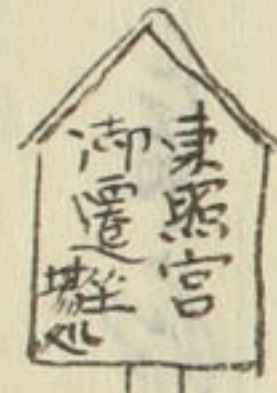
未詠出多罪く 其れとて其れ其れ其れ其れ
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ
其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

一 在屋 其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

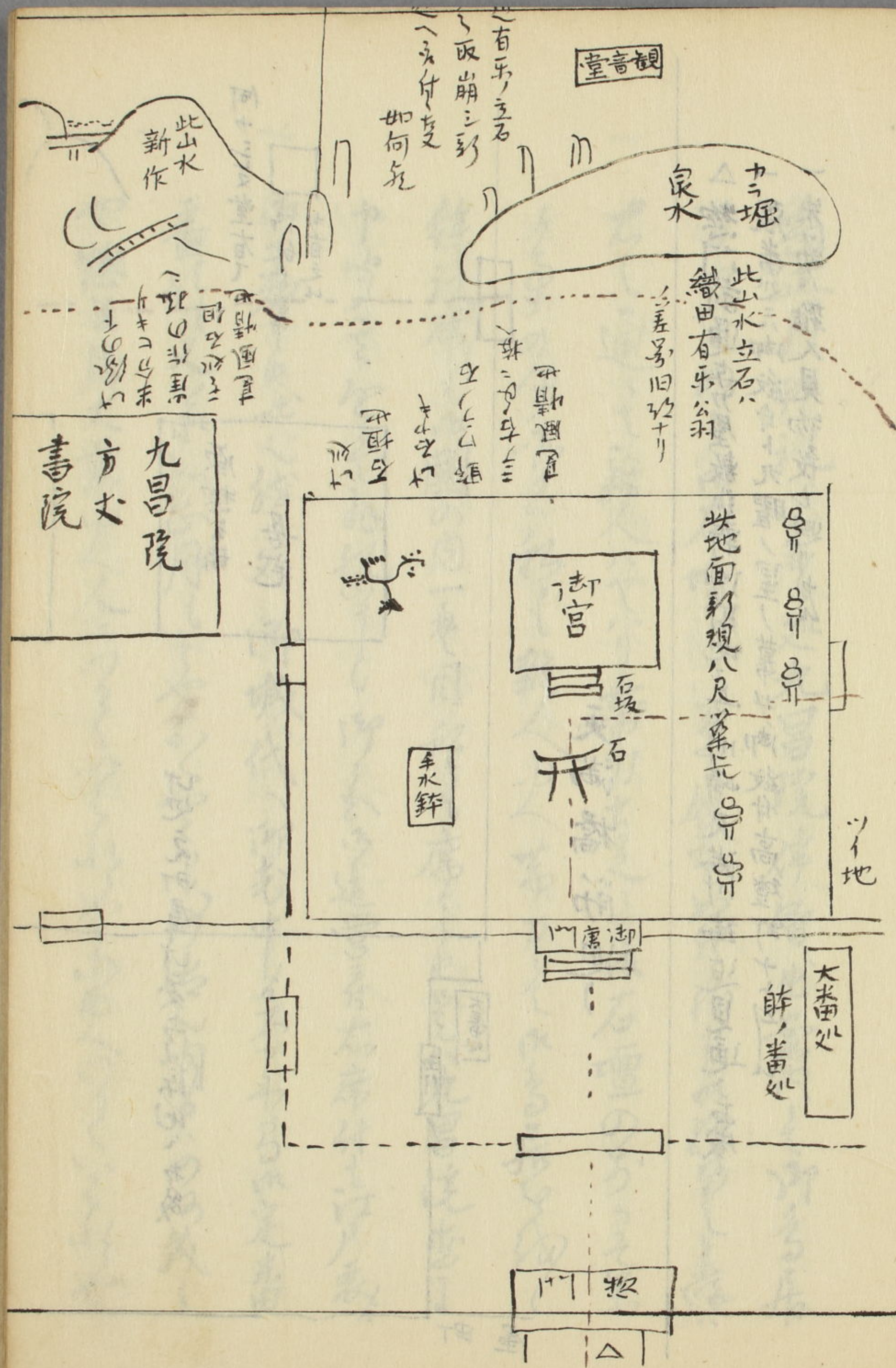
お時物決りしつゝも侍未東西と弁せられし
為つゝ御城内一の葦原と記しつゝ要八とありて
陸軍例も篤実と云ふはけり
御造営は御九分通り
出来し素石家長急惣と云ふ所の追口勢よりの
とより物々色々所々と云ふはけり
御造営は御九分通り
出来し素石家長急惣と云ふ所の追口勢よりの
とより物々色々所々と云ふはけり

一 天満九昌院 御宮去年中御造営は御九分通り
出来し素石家長急惣と云ふ所の追口勢よりの
とより物々色々所々と云ふはけり
御造営は御九分通り
出来し素石家長急惣と云ふ所の追口勢よりの
とより物々色々所々と云ふはけり

御一谷所筋を八金屏をとりしつゝ花纏を
由晚景先白 御紋付長持一棹をとりしつゝ
箭兵杖鳥口解し物相列り原惣と云ふ
羽羽馬上と外ふは火の影をとりしつゝ
番杯と云ふはけり
御造営は御九分通り
出来し素石家長急惣と云ふ所の追口勢よりの
とより物々色々所々と云ふはけり



御造営は御九分通り
出来し素石家長急惣と云ふ所の追口勢よりの
とより物々色々所々と云ふはけり
御造営は御九分通り
出来し素石家長急惣と云ふ所の追口勢よりの
とより物々色々所々と云ふはけり



何れもこの寺に生玉迎ふ南風之出火外に行列洞兼
 一町を町奉行の御座り此の寺に非番の方より大同心廿五人
 九昌院へ近付の中旨に御座り御遷座の儀に非番に奉行供
 奉の仕旨之先日ありしに町方より出立し御座り御座り
 在座居た方子杯の如くを四月十七日三雜人集結仕
 當年八月廿四日十日集結しき也天満橋の破換
 多かりお座り八段近掛の如くを大同心より御座り
 又旧屋後より又御座り八段出立御座り御座り御座り
 御座り八段の大槪御座り御座り御座り

何カニ又堂有テ

□ 淨紋付幕
井有之

原惣玄坊

居宅

付也之町屋 付也之河地、お成

天満橋筋通り

大番所

西門

屋町

△惣門前通与方屋敷の軒下用地ニ有リ川崎天満川端近見通にお成
一 張番處ニ御紋付ト九曜ノ星ノ幕ヲ御紋付高燈灯ト出ル
一 朱印助ハ雜人見物致し廻リナム

尚正月拜礼ニ系、此九昌院伴僧出業内之御多居

方刀とぬき石壇より系、履をぬき物中し、後、

右し通、之雜人ハヤリ帯刀去是、石壇のあり、

々、中、の、御、多、私、も、雜、人、少、人、帯、刀、之、以、石、壇、の、あり、

拜礼席も、此國の内、一、是、同、私、も、席、之、也、是、ハ、九、昌、院、也、

中、之、也、也、之、御、多、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、

以下、知、也、也、之、御、多、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、

一番、御、多、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、

也、惣、玄、坊、大、業、中、人、之、御、多、也、也、也、也、也、也、也、也、也、

硯蓋

燒籬 右の系牛房
隠えまきとわえんや

尚年以編孫ゆてとあ而別て

志ををん内流以物より一席とをん平の幟に建

惣此新以辛主以質林成或感煥不其山尚座兼凱例

一通甲乙以之このどりく 池菅苗

け中の志記根さのあやんさわわしとせき庭の池水

志うゆふ東原の流の流きとあやんは向の池のゆあう勢

池水とゆふゆいゆあんまのゆとせきとけしと海

生土の池のうささあ徳たよあゆんしゆのあゆと海

し化まに根よりして池に生るゆあんや志記とせきと海

志うゆふ根さしとせきと海の池のあやんをんを海に記

池記流も凡のゆあんの流りて江のあもゆふとけしと海

凡とせきと池のこもこにせき波のあやんゆのゆと海

一 四月十六日酉九附印北節或いあ合少巻流に印付在屋

次賢志細さし 御本九附右英ハ割継とお成る唯今すえ

牧年劇染、同寮中奥言をゆ離友仕抄念を

方、右志右英先年印供泊、そゆ七九に七、年お勤

内式番紙、右定番を大御番方
山紙口方 右方へ申通、以上の集、

り、す、相書ゆ、七、年の内、日、常、お節、尚、附、と、流、横

あつて胸の二道力也此物也といふは子傳不焼紙に更
相知不事也

一 蕨糸より芝草を飾り多しといふは石川氏小指^{ツカ}に後後
後甲より口合ははあつたといふは子傳不焼紙に
秋に研果と申す者といふ合くまを相之くといふは馬
の研果を交つて並べり物の色なりと云ふ 同人申す
浸紙の中秋のよう一英穴穿る相之く二浸紙淺草風
よ色をかき所好路もよけ紙ハ若浸といふは子傳
製出より紙の厚く少くハ全神志の切紙ありを浸紙

よけて志帆片紙のふるとに入らる秋を繕うる物と
後後家なるものもあつたを浸紙とて細工の細紙に
し付るもの少くあり

一 平賀菩提樹に記す中何れも多し耳公し不事といふ
よりのものも少くあつた中道

一 左系糸子破後にお成りたるもの雅なものを追便
りて之

白華月六日 当堂より

連中

成烈君

一 佛誕前、飛殿帖之朔到來お見え二月廿四日、御
凶變、成今更子拜款、再三毛紙と心替、今
月十六日修、に 作付、延河帖、古と新、一、次先ハ
蕭、ちかふりハ、墨、少、書、居、わ、く、一、統、御、仁、氣、と、書、わ、し
梅井、と、書、来、云、ハ、九、こ、山、鉦、切、御、在、先、二、書、付、が、こ、書、り
と、書、わ、し、深、澤、と、ハ、是、近、山、別、集、し、は、お、書、班、こ、と、書、成
之、ハ、入、番、の、初、め、と、と、あ、り、ら、を、通、山、幸、吊、子、書、わ、り
牛、鼻、ハ、之、為、氣、と、と、急、と、と、書、出、氣、ハ、お、注、り、書、是
ハ、私、心、ハ、地、上、ハ、首、尾、と、と、書、注、り、ハ、町、と、書、わ、り

得先牛鼻ハ一足とて氣と中人の嘆くお看と書

在る子のののの

昔のちよひ海をわたりも浅くしと河にたはたさる

さくさく

成烈

ひまのりまのな花屋の社たけぬ右のうねりた

たけぬ

はくし一年月夜しとるくよ天の山舟のあはれ

とあはれ

成烈

夏舟のあはれは海雲のあはれとて波はせり

誠ニ能ク其も申之る事ハ一ツリ申一ツリ申一ツリ申一ツリ申一ツリ申
宇上女とてその事也

一 生便を以て居候の内のとやハ其候こそそワリ一ツリ申一ツリ申

子の日セ一ツリ申のし候ハ佐吉の

一 下総國分寺古瓦房仲子少御孫人の也跡多るの武元

國分寺古瓦ト仰せせし候も其事也松州を以て陳五郎

一 細井隆吉訓て上院の事之也少御孫を以てを言ふ候も

その事也月也其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也

問の字ニ舟ハ其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也

相後豪識の事も不見る事也其事也其事也其事也其事也其事也

切後て其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也

得とて其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也

と柄ありて但同一古事也其事也其事也其事也其事也其事也

寫其也其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也

形とて其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也

ハ其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也

其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也

其の下其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也其事也

一 結乳山料理業や西陣織敷の事一ツリ申一ツリ申一ツリ申一ツリ申

一 在屋より秘飛撒おえぬをいふもいふもいふもいふも
中よる一 追次といふ人おたふすも 是追まき答

一 鳥山ト少敏去月申旬 禁裏の命の席を即倒

一 逝去といふ事部右衛門町人吉しお書上の心算物

一 多し葉塚系といふ御しお河原あつらひの書上の

一 所和方といふ人といふは上進していふおとといふ

一 磯と高徳の時節といふなり

一 当年の條中の人對人といふおたふすといふおとといふ
おとといふおとといふて在番の若殿高進也川儀の之則

百首よりいふおとといふ四月十日又百首おとといふおと

是弱女といふおとといふおとといふおとといふおとといふ

去ル去ルといふおとといふおとといふおとといふおとといふ

大勢にお成し是全く成烈といふ大中といふ何しおしおし

といふおとといふおとといふおとといふおとといふおとといふ

一 大六の條の大西如お慶多といふおとといふおとといふ

おとといふおとといふおとといふおとといふおとといふ

大勢といふおとといふおとといふおとといふおとといふ

廿月方

成烈

下雲根

飛流擬洗耳應似許由山牧人如有意尚自牽

牛還

幸ニモキリ一ト貫其尾ノ句其の尾ノ字とアリ

為依山の峯のそのりきく松風に命を吹く

正業をのりて追ふる乃に池田伊丹山

切処を牧の庄と云青木繼敏ゆ知りし

石とて

東去平安城十里

牧之莊

北去箕山龍半里

南去大段莊五里

西去池田莊一里

一

ト碑文有く往來少くは歸不足為妙念く

野呂如臯の語に江戸関口あり丁豊治や故十有娘

童吐水を功夫一火三放造り出鎌倉の庄

前の店扱はん菩提処櫻町宗栢寺へ一ツ納

或と此澁松寺の客の地走に

一儲に来り貸きりるる彼寺の雛僧下部ホッ

さしや内とが換さるる追て宗栢寺を

家にあの上りるる故に豊治の

云十も力大工を内を

小若も十ある白け若ハ予カぬ之名テ予ノ御子てハ
く若を入ると母大ニ答曰け若ハ成能出あるも
あくる命もけ若なるも此の町の町にふるも
誰り細工も出来ぬ海へ出てハ切角の巾着も後
るに成り舟に若を乗せてその仕つけの志の成
に以てハ若も若も十ある若に成りハ其ハ海に渡
しに江戸中には細工人の世も人々も成り利を食
ふに予りも若も成りハ其志の成の用も其も成
作も天下もふるも大なる町人ともふるも大なる七

心んと一子の成終て天下にがりし人なりんと
大ニ成りかの内の若も其も成りて 梶も其も成り
成りも其も成り利も其も成り希人なりハ大量の
らんと感一作り

一 鳳仙院近藤義休翁来月廿七回忘と多中一追
美いしなるも何年か成りて其も成り何れも
懐旧やよも追役上り也且其も成り其も成り

八月十八日

東

- 一 皇女二為友幸飛擧會出席守壽正社伝古成方
在屋以忠爽友乃房仲掛物花汁総口平硯蓋
- 一 百韻取開蓮キ景物扱多ク之世集草 一
和ソク多クソレ也也後の夕、中も
- 一 百四 御忘相御御能く夏
- 一 女川也一見物群集く処空云は曲く鬼元の類
とまると風邪流行附吉系戯如火と付とる出
- 一 多文辻懐宗固今文よの分
- 一 松平松州死後寺々浮時し分け君の

- 一 ○卯世出飛擧答水辺花惜答花山点何分年終
- 一 天満九昌院 御文川造業三舟大りや夏と
- 一 一のこ一珠とや夏
- 一 郭公ら成山ゆり也換攻
- 一 伴常景所人濱州の女と通情の始末疑くハ虚説とわ
少夏○尸奴大病く夏
- 一 長田抱中記賣一市夏去十八日在屋亭也○素人海人一人言あり少夏

白華月廿二

連中

成烈君

山名凡二一してあり 是迄御答

一 當春所凶變ニはき宗國法師のふいふをていふを
石野彦通のふ御目こつけもやとす

山風よ秋を引くき花りもて世はくはるの暮舟のこ

一 在る日ける美年むとふのふを被皮にりこもや

少流の中もふる光中よ  角と

作り中に細をほけて玉何とあはれをかくて上の回み
くけり志留よかして細さかたにまひりありも
くけぬぬとたはるををいひるもかり

一 高田村水稲荷の社也白苗集より新富士を葉極

ぬき成りりくあをあげ 融敷をきり 井戸くこ多く入

高きし水あり 不中い餘ハ不也本 て當六月出来中山例の山所とちやとあり

志とばもやをりもふも あなるを 山所くの名をすの

面取もや奇くこのり やと 山所のあ細いさ

田馬坊下所よ竹燈やあり の隠指 名を筆志を後

何してふの枚 の枚 毎士と兼うと志ををいふ 志

ゆて今ハ御中や講中の志をの紙の紙は成て

毎士の志をいふ のハ 志をのものを頼り子分な

らんハ先をいかにぬれよ何れかありけりかかの
 のよ七十有業にありそ今い所を去るの御
 あつたかゆへ好むぬ士らんぞやういふ事ありけり
 何年出而くぬ士勸まきういふ事ありけり
 那れんち子分ののいふ事ありけり
 ことかのあ箱ののりあ七世いと世の役ありけり
 けりていふ事ありけり
 あつたかゆへ好むぬ士らんぞやういふ事ありけり
 ○観竹山王権現の仕代の本ありけり

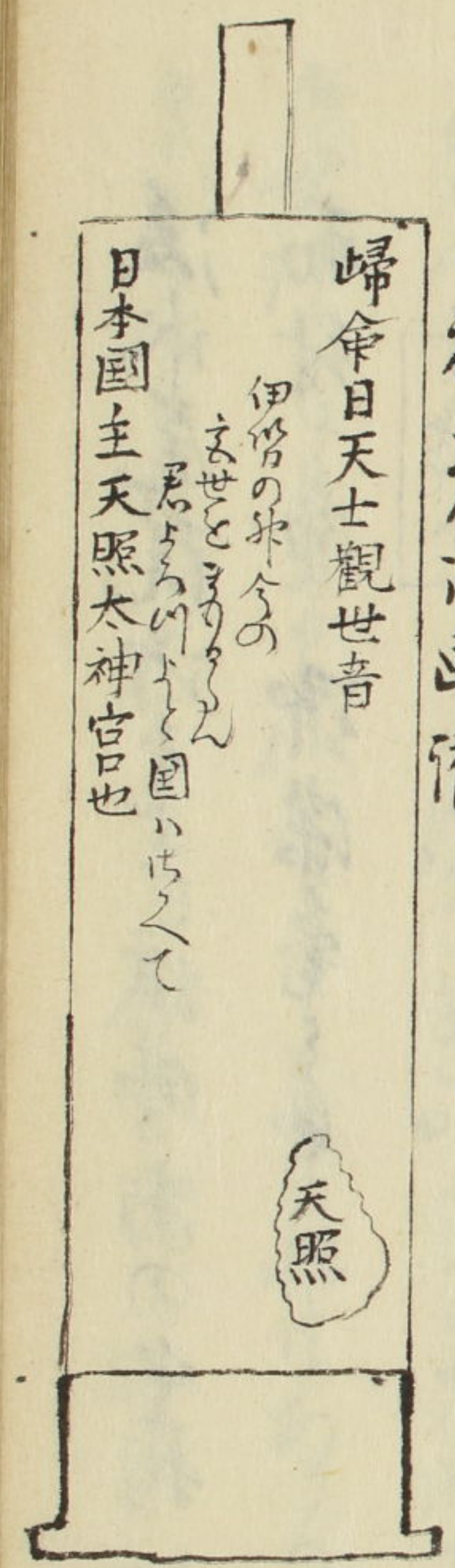
らんハ先をいかにぬれよ何れかありけりかかの
 のよ七十有業にありそ今い所を去るの御
 あつたかゆへ好むぬ士らんぞやういふ事ありけり
 何年出而くぬ士勸まきういふ事ありけり
 那れんち子分ののいふ事ありけり
 ことかのあ箱ののりあ七世いと世の役ありけり
 けりていふ事ありけり
 あつたかゆへ好むぬ士らんぞやういふ事ありけり
 ○観竹山王権現の仕代の本ありけり

神君御画讃

歸命日天士觀世音

伊勢の神々の
 文世とまのり
 君よらのよく國ははくして
 日本國主天照太神宮也

天照



後水尾院御毛色紙佛齒の宝利

初封と節 御深毫と也

世に
くまぐ
ちやく

基盤 將基盤 太刀口を流り集て仍るに

面西湖の八系とらつて信條あるものあり

本月の御茶壺 右 御君の御奇附と也天下三ツ

の目と云 太刀 義朝の太刀の也

一 守壽曰はる御各貞權に美く不迫又と情選の御戸志

の御書取るとも角田川 鐘ヶ副の御享保と也

有徳君御川將の御大盤石の御御の御何とに御是

とる御事んを御とる御事と御の御御の御中と也

て御て御御と御御と也 君の御と御と也

と御と御と御御の御御と御御と御御と御御と

大御の御御の御御と御御と御御と御御と御御と

一御人よ御御と御御と御御と御御と御御と御御と

御御御と御御御と御御御と御御御と御御御と御御御と

御御御と御御御と御御御と御御御と御御御と御御御と

洞春義信筆



揚柳垂々々の也

河の故を去らん河にまのぬくよてぬを命を危よ
よに孫ぶりの名をなする事よはるる事よ今を先也
此奈の故を去らん河にまのぬくよてぬを命を危よ
のぬくよを去らん河にまのぬくよてぬを命を危よ
るまよを去らん河にまのぬくよてぬを命を危よ
と直るるのぬくよを去らん河にまのぬくよてぬを命を危よ
洞春也大なる事よを去らん河にまのぬくよてぬを命を危よ

河にまのぬくよを去らん河にまのぬくよてぬを命を危よ
八日吉勢平花散會する河にまのぬくよてぬを命を危よ

前此糸野大川筆 右義信
送物又云来方送ん

香箱

香 清相壺 梅枝
紅梅面鏡 右土種

見臺

義休消息掛
全於最秘抄

送り物ありまのぬく
波の月

和衣志懐旧の心分るるを也懐旧と身中

ゆるる林并かの家家庭一も女なるもも一物山も

中一もて遊らるる向山はありあり 心んや一種

所連若くを也一積りあり今日の飛撥中四一も遊る者

ふかむを何事よぬ身有身深氏お徳を講一巻一

後をよりし深氏かの石のるもなりひをりまのぬく

主なるに在居のふ成りてぬきけりるなりぬ
の志知りしもあつるもなるも遠まの初候にき構し
中の扱ひのそつ遊音の念にし
の獲りしつれもき仍ちるも自中のふ縁も平希

狂奇頌 井戸綱係

其深もくしし
井戸をくともくつて成と母の所くとも先る汲立の水
井し目と係もはくしの綱と繩と
井戸の水もくとも係と
在英
在母
在屋
在方

冷あどれやの先井戸のそく業純のしらのと係也
其風もあゆら係もくともあつる蛇の井戸也
あつる也かたのそけり井のそくもあつる蛇の就と係也

寄馬余意

其目あつるや河毛の馬のそくもあつる蛇の具と係也
其目あつる蛇の具の尾とひりりし物と係也
其目あつる蛇の具の尾とひりりし物と係也
其目あつる蛇の具の尾とひりりし物と係也
其目あつる蛇の具の尾とひりりし物と係也

くま向ハ是不中し信昔の衣子てぬし并 左右の神を
志何のりり近後家入干菓子と也野子佛をてる事
之御もて執後至人近也わ覚以丁寧く成示るぬし
剛返上

- 一 雁奴辞世表ニ事早也新益にお成り申し三浦救馬も
終焉嫡孫御十七八実父方乃入来の風吹りて炭泉の
際とぬし年々半飯泉く度多し南無妙法蓮華經
一 伏見街道酒肆の引板右叫京都の人を後不面を
一 米乃子御古物の奥書のう詠を御返上といひて度

一 喜店の方々く御海をく比御して申以上

中元

成烈

- 一 林鐘八日三枝御亭会飛檄初秋九日到来絆閑
ト山敬度中風のみ症之遊去ハカク先途命のハ虚説也
是ハ安友毒内カシク○同僚吾人の度入番の類一人も
ハムキヨシニ事ハ是カク大業ニシテカク○多田三八正峰 公儀ハ
印門人
三上辰元季造 隆音取立也
有柳川家印門入 本間源二改村中山次下右
宏充 正峯ハ相番先年カト
一西年引志あり 小林東助正智 律にカク松の
出カクカトカク
女中カクカトカク 石川岩次忠房 本間九八トカク
の仕カク 右何

此後人故相番に飯沼平九正国森川庄七信彦石野廣通

之ヲ小長吉大二時明私但遠私徳星明私

元信豊実岳師門人石野隆廣傳弟子何村善

右勝彭近年牧野助十正和右有栖川家先師山門人

物之右の内徳星河野流方と深々私と正智の姉と

加部右十二人各至首と御一額名十二首一帖以

住吉の社一子納去月廿五日成烈則津守上総女宅一掛

糸中込処即刻を納下付し之役人業内社迄

新討浄衣の袖人三人出一御如社の扉と開玉津

祝の太社と下七神慶し巾俵、御成烈を蘇上下

悉く律礼物大慶し津守大家の御子叩て法

夜活可上下○箕尾山ハ蓮米二君ハ見残のよう

生涯の遠遠恨とすり是又妙の夜活の事

一御山変り而石野翁の分を牛輿より上り也

一奉玉と中のある○の御休み御追言以合別け此後

今感公及於痴の水をらる美容峯のる事ある

及於先達の為付とらる志はしくある山王社

地奇瑞回定定冥宝臨安子の鐘岡の子ニッあ

名も知らずるが私様世後かへりてはなほ
不徒何れも私ハ少なりまゝ不後ありては
幸もそのまゝと北をてりてはなほ
多く出れを求むるは冷れまのまゝ
若を流しんりてはなほ
二匹のえ感れ上はよりハ先えんと
かみかへりて批判も下上て○新
おのえ驚り入るは風雅石風雅の
と物ハ少なりはなほ

四万六千日 晴暑強

茂烈

卯連中振

一 河野佐州画の夏英曰唯烈曰何廷哉
一端午の日採採勝草館飛撒会諸君在馬の也
系古書は料理經之也
在江戸に種々し味をたすものも書きも取
あむら故為事し仕る少海念ても月
何し感取甲乙し候も夏及も
至て心も少志をたす少

け者の危の危ああらぬあやめや人をしるしめん
まらりや花の昔庫よや千人のさき共のあやめ
まらりや花の昔庫よや千人のさき共のあやめ
まらりや花の昔庫よや千人のさき共のあやめ
まらりや花の昔庫よや千人のさき共のあやめ
まらりや花の昔庫よや千人のさき共のあやめ
まらりや花の昔庫よや千人のさき共のあやめ
まらりや花の昔庫よや千人のさき共のあやめ
まらりや花の昔庫よや千人のさき共のあやめ
まらりや花の昔庫よや千人のさき共のあやめ

一 花く又一花 都合七首

一 櫻井高きく九仰り成 一 浪津津下く一 割道く

西成くも幸の少外と祖る好まらる馬場善又
同田文左成経大慶くそくそくそくそくそくそく
色くももや

一 藤田泰通仰用掛 等 唯お知れ大慶おハとの
勝手にもて相成れ一人の所書く 能者もまや

一 餅具湊紙と中形くも所新くよき 孝問告別所
岩伏くも中形くも所新くよき 孝問告別所
くも中形くも所新くよき 孝問告別所
湊めくも中形くも所新くよき 孝問告別所

一 平賀善提樹々其為る事年をかく能く例しうし
と多の門人と先生と河内地と之候の足織をよ
く年明しとやと耳に且先ハ世上の佛名ハ儒
者見をたる也て世出世一致の道理を吐し
各ありあふ事や天狗齋齋よりハ偽りれども
切もわらふ事やと有

一 忠英之十七年拾遺傳云道徳分取糸と口唇に
所傳一よりし先有哲介と申候到東果に道徳を
伝へし事有也と申すよ又一口の大お後ありと有

一 何より所付の事と申すも六月迄つらうて年終
本語凡文通のえまて去つて道中其の事と申す
多る事と書候事一あの事方と申す事と申す
中山 古き報

一 葛尾の事活山安全事等々去用申す又道中
呈意状の去月才なる所と申す留候御鳴玉造御
定番り創事松の末ハ最也其の事と申す成事
二事りし事御是思あり候事御事需と申す
六日同夕迄と申す極上ハ御事候事御事

西條出—七方屋をとりてありしうを誰より大いなる
あり （一） 後不律のく大いなるあり

一 泉木二日尚友亭所會し書一紙十言到來おん
景物所利運く是○女川出のさくつものおのれり
於今—○あ文述懐耳吟ましく○厚時瓦の松
風ハ杉州彦葬送の夜の吟のゆ—事時あやう○
長田屋敷のゆ一断腸の○素人講人再興
ゆ—珍重

一 板井秀く十七ああハ （一） けるゆのま—そ氣又と
（一）

五頃こ出のま—結波来 （一） ける小辨七尾吉
物をも大い痛のり○高木く—と出列おあ
兼知はく 六月十日 成烈

一 鳳仙院義休居士七回忌追悼 懐旧

るま—はるし—之花の若成志—まの—利貞
集央—まの—あ—ぬ—の—在
空餘—る—は—の—は—
現—は—は—の—は—
他—は—昔—の—は—の—は—
他—は—昔—の—は—の—は—

一 今日會幸し兼紙詠を記し与く如石山御後まゝりく

乃く遠慮せり事一 秘甚大稀并奈白七ツ

秋瓜におもひの葉の散消ははらふはる影をまはる七尋

鳥よ木と云しハハハハハニ星うな

うき外影を華の葉のそとをそと掃の影のほほ在

西陣と大陣のるや天の川

さゆはるは御の葉を物さよ芝を居る秘の秋のそは友

かひまはりまのこころ秘の秋のまゆは花よ葉おろし七葉

門くは短冊や竹のうら

清沙の芝をまはる花葉秘のあちちの蟲を影を次

天の川 秘并て高きや月の舟

秘の事を河の葉は秘の葉末の葉よ影をまはる信

和名やよ色の糸の虹おひそ

秘の秋は風のふ枝の蟲あして思はる葉や影のそと成

かきまきや比ぶの木のこころかひて

秋河の河の葉のまはるはとく冊まおまのはれ直者

あぢやりの舟かやあゆの川

まの世よのへそいぬ消て舞をまらるる夜半の杜風
まのよのこころこころのねよと光輝ゆるるるのま
まのよのこころのねよと光輝ゆるるるのま
まのよのこころのねよと光輝ゆるるるのま

七夕詠

○と胃の晴て 星もあふ夜よ 何と写らん
機織のひり 籠て入火り 身よあはれま
半草草の 床とあふまき ち ち英
○牛のあゆま 尚遙くぬく 機のおく
ねいこころの 月の後丹舟 腕の紫原を

あゆの川原もまらるる夜よ ち成る
○とあ七夕の 笑うこころの ちらにる
神やうらぬ 鳴るる井の ちく鶴尔
まらるるの ねやまらるる ち直る
○幾ねのけて ちららるるぬ ち一服は
草の世のまら 何とあはれを ちよのまの
あゆのまら ちよの晴天 ち成る
○機織ひの ちまらるるは 牛印のねよ
ひまらるるや ちあ願う深き 天の川舟

浅くぬ顔の 星合のころ

たあぢ

○あふいとふ代と ちまるところ

あつたてぬ

天の河波 うきわたの

跡残るん

りまらの橋は 深やいよ

魂を洗ふ

潤市のころ ちまるところ

娘ころ

つらまのころ ちまるところ

星のころ

あつたてぬ

た連歌

○年不一候の ちまるところ

昔ころぬ

あつたてぬ 尚ほふき

ちまるところ

天の河へ ちまるところ

た連歌

一 次賞下とみねの扇お屋の縁を流るはあふいと

手あけ別代神玉足分市 藤成片きり

いふあつたてぬ

一 有徳院様御代小納戸小林安吉史記

有徳院様 御代小納戸小林安吉史記

いふあつたてぬ 満勢院様御代史記

奥にちまぬ御結あつたてぬ ちまるところ

風を 御代白子史記 ちまるところ

和の尾公はあはれ舟あはれと南窓の……
きぬ例え ちとあはれ舟 和成あはれ舟と
所あはれ舟あはれ舟と…… 偏舟はあはれ舟
あはれ舟はあはれ舟と…… 偏舟はあはれ舟
あはれ舟はあはれ舟と…… 偏舟はあはれ舟
あはれ舟はあはれ舟と…… 偏舟はあはれ舟
あはれ舟はあはれ舟と…… 偏舟はあはれ舟
あはれ舟はあはれ舟と…… 偏舟はあはれ舟
あはれ舟はあはれ舟と…… 偏舟はあはれ舟
あはれ舟はあはれ舟と…… 偏舟はあはれ舟

一 秋風あはれ舟…… 偏舟はあはれ舟
知着と…… 偏舟はあはれ舟

数あはれ舟…… 偏舟はあはれ舟

二 南極星の…… 偏舟はあはれ舟

…… 偏舟はあはれ舟

三 たぬきに…… 偏舟はあはれ舟

…… 偏舟はあはれ舟

四 あはれ舟…… 偏舟はあはれ舟

…… 偏舟はあはれ舟

五 清濁…… 偏舟はあはれ舟

六 好の…… 偏舟はあはれ舟

